

島本町文化財調査報告書

第 19 集

広瀬遺跡（国木原）発掘調査概要報告

平成 24 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は、原因者による宅地開発に伴って、平成21年度に実施した発掘調査の成果を報告するものです。

当調査地は、町内の遺跡包蔵地である「広瀬遺跡」にあたり、遺跡のほぼ中心を西国街道（旧山陽道）が走り、古くから交通の要衝として発展してきました。

また、後鳥羽上皇の造営した水無瀬離宮跡を含み、町内で重要な遺跡の一つとして注目されてきたところでもあります。

その結果、今回の調査では、たくさんの軒丸・軒平瓦の出土や礎石建物跡の検出など、大きな成果を上げることができました。これらは、今まで良く分らなかった水無瀬離宮の実態の解明に一石を投じたものとなり、島本町の中世の歴史を解明していく上で貴重な資料であると同時に、日本の院政期研究にも大きな成果を提供したといえるでしょう。

島本町では、平成20年7月に島本町文化財保護条例を施行し、住民共有の歴史文化遺産を広く公開し、文化財や歴史に対する意識を高め、個性豊かな町づくりを推進しています。こうした資料を展示・公開、また活用し、町の貴重な財産として大切に守り続けていくことは、我々の責務であります。また、埋蔵文化財について包蔵地の周知と保護を行うとともに、未だ遺跡の確認されていない地域での調査も実施し、新たな埋蔵文化財の発見に努めています。

最後になりましたが、発掘調査・資料の整理報告にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また調査にご理解、ご協力いただきました土地所有者の方や近隣の皆様方には紙面をおかりして、深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

島本町教育委員会
教育長 岡本克己

例 言

1. 本書は、平成21年度原因者負担事業として、大阪府教育委員会事務局文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会囑託久保直子を担当として実施した、広瀬遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成21年12月10日に着手し、平成22年1月30日に終了した。島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、平成24年3月31日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)

【調査員】 坂根 瞬

【調査補助員】 原 由美子 木村 友紀 布施 英子 藤田 真理子

4. 本書の執筆は久保・木村(遺物・瓦)が行い、作成・編集は久保、坂根が行なった。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。
6. 現地作業及び整理作業においては、下記の関係機関ならびに方々には貴重なご指導ご教示を賜った。記してここに感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

大阪府教育委員会事務局文化財保護課、帝塚山大学 森 郁夫、京都産業大学 鈴木 久男、同志社女子大学 山田 邦和、八幡市文化財保護課 小森 俊寛・大桐 真白、(公)京都府埋蔵文化財調査研究センター副理事長 中尾 芳治、(財)京都市埋蔵文化財研究所 網 伸也・上村 和直、(財)長岡京市埋蔵文化財センター 岩崎 誠・木村 康彦、奈良大学 西山 要一、京都文化博物館 植山 茂、京都大学人文科学研究所共同研究員 豊田 裕章、(独)奈良文化財研究所 次山 淳、奈良県立橿原考古学研究所 清水 梨代

凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海水面(T.P.〔Tokyo Peil〕)を基準とした数値である。方位は、国土座標第IV系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。

P：ピット SD：溝 SX：性格不明遺構

4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目 次

序 文

例 言

日 次

挿 図 日 次

付 表 日 次

図 版 日 次

第1章	はじめに	1
	鳥本町の地理的・歴史的概要	1
第2章	調査の経緯と遺跡の概要	2
第3章	広瀬遺跡発掘調査	3
	1) 調査概要	3
	2) 基本層位	5
	I. 第1トレンチ	5
	II. 第2トレンチ	7
	3) 出土遺物	10
第4章	まとめ	25

挿図目次

鳥本町内遺跡分布図 (1/10,000)

第1図	鳥本町の位置図	1
第2図	調査地位置図 (1/2,500)	3
第3図	調査地地層断面図 (1/100・1/50)	4
第4図	第1トレンチ 平面図 (1/125)	6
第5図	第1トレンチ 瓦群と柱跡検出状況	7
第6図	第2トレンチ 平面図 (1/125)	8
第7図	第2トレンチ 石敷きと建物跡検出状況	9
第8図	出土遺物実測図 (1/3)	14
第9図	出土遺物実測図 (1/3)	15
第10図	出土遺物実測図 (1/3)	16

第11図	出土遺物実測図 (1/3)	17
第12図	出土遺物実測図 (1/3)	18
第13図	出土遺物実測図 (1/3)	19
第14図	出土遺物実測図 (1/3)	20
第15図	出土遺物実測図 (1/3)	21
第16図	出土遺物実測図 (1/4・1/3)	24
第17図	検出建物想像図	25
第18図	現地説明会風景	26
第19図	調査終了後の宅地風景	26

付表目次

付表1	軒丸瓦観察表	22
付表2	軒平瓦観察表	22
付表3	軒平瓦観察表	23
付表4	丸瓦観察表	23
付表5	平瓦観察表	23

図版目次

図版一	広瀬遺跡 (調査地全景・第1トレンチ)
図版二	広瀬遺跡 (第2トレンチ)
図版三	広瀬遺跡出土遺物 (軒丸瓦)
図版四	広瀬遺跡出土遺物 (軒丸瓦・軒平瓦)
図版五	広瀬遺跡出土遺物 (軒平瓦)
図版六	広瀬遺跡出土遺物 (軒平瓦・丸瓦・平瓦)
図版七	広瀬遺跡出土遺物 (金属製品・白磁)



1. 山崎古窟 2. [府指] 有文 間大明神社本殿 3. 鈴谷瓦窯跡 4. [重文] 水無瀬神宮客殿・茶室 5. 水無瀬離宮跡
6. 桜井駅跡 (6) [史] 桜井駅跡(楠木正成伝承地) 7. 伝持青小侍墓 8. 越谷遺跡 9. 源吾山古墳群 10. 水無瀬住跡
11. 御所池瓦窯跡 12. 桜井遺跡 13. 桜井御所跡 14. 広瀬遺跡 15. 広瀬南遺跡 16. [府指] 天 尺代のヤマモモ
17. [府指] 天 大沢のスギ 18. 山崎西遺跡 19. 神内古墳群 20. 山崎東遺跡 21. [府指] 天 若山神社「ツブラジイ林」
22. 御所ノ平遺跡 23. 青葉遺跡 24. 広瀬溝田遺跡 25. 鈴谷遺跡 1001. 西国街道

島本町内遺跡分布図 (1/10,000)

第1章 はじめに

島本町の地理的・歴史的概要

島本町は、大阪府の北東端、京都府との境に位置する面積16.78km²の町である。北は京都市西京区と長岡京市、北東は大山崎町、東南は八幡市、南は枚方市、西は高槻市に隣接する。

町の面積全体の約7割を山岳丘陵地が占め、人口約3万人の自然豊かな町で、町城の東南部で、木津川、宇治川、桂川の三川が合流して南西に流れる淀川が造り出す地形は、北側の天王山山塊と南の生駒山地の南端となる八幡市の男山丘陵とを分ける山崎狭隘部と呼ばれる。

自然環境の面でも「大沢のスギ」や「尺代のヤマモモ」「若山神社のツブラジイ林」が大阪府指定の天然記念物に指定されており、豊かな自然が残されている土地でもある。また水無瀬神宮の「離宮の水」は後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮にちなんで名付けられたと言われており、昭和60年7月に大阪府内で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

また、島本町では、国指定史跡桜井駅跡をはじめとして、多くの遺跡や文化財が周知されている。

島本町における人々の生活の始まりは、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器とチャート製の剥片数点が採集されていることから、旧石器時代にさかのぼる。町の西側に位置する越谷遺跡では縄文時代後期に相当する北白川上層式1期から2期の鉢・甕が多く出土し、弥生時代の土器も出土していることから、狩猟・採集の時代から集団で稲作を始める頃へと、人々の生活が途切れることなく営まれたことが想像される。

奈良時代になると、奈良の東大寺に瓦を供給したのではないかとされる鈴谷瓦窯、西国街道を中心に広がる広瀬遺跡でも集落跡の存在が確認されており、広範囲にわたって、生活の場が存在したと考えられる。また、水無瀬川の西岸部には、東大寺正倉院に残る日本最古の絵図「摂津国水無瀬莊図」に描かれる奈良東大寺領の莊園「水無瀬莊」が造営された。

その後、平城京から長岡京、平安京へと遷都されていくにつれ、島本町は水・陸の交通上重要な位置を占めるようになった。「延喜式」にある山崎駅の記述や『土佐日記』『更級日記』などには、山崎津の賑わう様子が記載されている。平安時代以降には桓武天皇や嵯峨天皇が頻繁



第1図 島本町の位置図

に訪れ、中でも後鳥羽上皇は、鎌倉時代のはじめに水無瀬離宮を造営し遊興の時を過ごした。

中世期以降には、『太平記』の記述で有名な史跡桜井駅跡がある。この史跡は延元元年(1336)足利尊氏の大軍を迎え撃つため京都を発った楠木正成がここで長子の正行に遺訓を残して河内へと引き返らせた「楠公父子別れの地」として広く世に知られ、現在もこの地を訪れる観光客は後を絶たない。また、時代はさかのぼるが、桜井駅跡は奈良時代の初め、京から西国に向かう道筋に設置された駅(うまや)の一つに「大原駅」が続日本紀に記され、これが桜井駅跡を指すものとも考えられている。

第2章 調査の経緯と遺跡の概要

本事業は、民間業者による宅地開発に伴う発掘調査である。調査地は「水無瀬離宮跡」を含む「広瀬遺跡」にあたり、近年開発の進む町内では、比較的広い範囲で耕作地が残されている地域である。

調査範囲は道路となる部分を対象とし、宅地部分は建物建設時に立会い調査を行う予定で調査を進めた。結果、瓦の大量出土や建物跡を検出し、これらの遺構は後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮跡と同時代に建てられた施設の一部と推定され、今までよく分らなかった離宮の究明に一石を投じることとなった。

広瀬遺跡は、町内の東端部を北西から南東の方向に流れる水無瀬川の右岸に位置し、遺跡のほぼ中心を西国街道(旧山陽道)が走り、広瀬地区全域にわたる奈良時代から近世に至る大規模な遺跡である。中でも、水無瀬神宮が所在する付近は、水無瀬離宮跡として別に包蔵地の指定をしている。今回調査地の東側では平成元年に発掘調査(島本町立第一小学校プール建設に伴う発掘調査)を行っており、水無瀬荘民の生活を示唆する梁行1.6m×桁行2.3mの不等間の倉庫建物跡や、水無瀬離宮造営期にあたる13世紀代の土師器皿の土抗を検出している。また南側では、平成20年12月～21年3月の調査で中世の柱跡などの遺構を発見すると共に、弥生時代から近世に至るまでの長い期間の遺物が出土している。

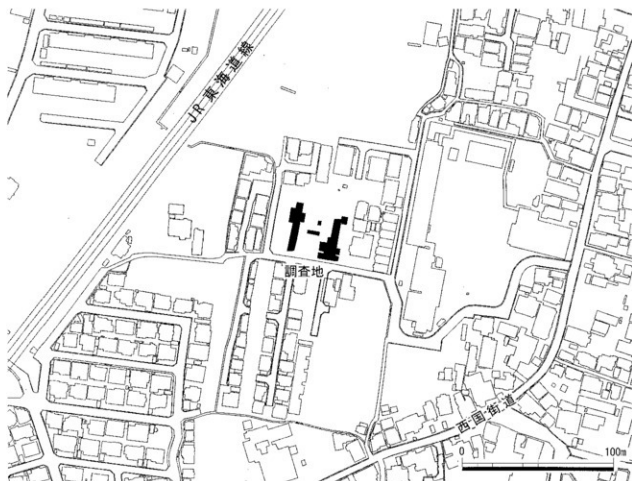
広瀬遺跡に含まれる水無瀬離宮跡は、後鳥羽上皇が造営した離宮として有名で、藤原定家の日記「明月記」などの史料からは、この離宮に30回以上も行幸し狩猟や歌会を繰り返していたことが分かる。離宮は正治元年(1199)に最初、現在の水無瀬神宮を中心として、水無瀬川と淀川の合流地点付近(下御所)に造営されるが、建保4年(1216)に洪水に遭い、翌年、西0.6kmの方向にある山手の百山付近に新御所(上御所)の造営が行なわれたことが推定されている。この遺跡に関する調査は、平成19年に水無瀬神宮の入り口付近の公園敷地内(西側)の調査で、井戸1基(近世)と室町～近世の土器を検出している。また、平成21年の調査では、神宮東裏の駐車場の敷地で中世の溝や瓦類を検出している。

第3章 広瀬遺跡発掘調査

調査期間：平成21年12月10日（月）から平成22年1月30日（火）

調査地：大阪府三島郡烏本町広瀬一丁目 地内

調査面積：約400㎡



第2図 調査地位置図（1/2,500）

1) 調査概要

調査は道路設定範囲を中心とした。道路はコの字型で設計されていたため、トレンチを東側と西側に2本（約30.0m×4.0m）、北側に1本（約20.0m×4.0m）設定する計画とした。

最初に層位を確認するため、北端に約2.0m×2.0m×2.0mのグリッドを3カ所開けた。ここでは3カ所とも自然流路と見られる層が広がり、包含層や遺物は検出できなかった。

次に、調査地西側に、南北約32.0m×東西約4.0mのトレンチ（第1トレンチ）を設定した。耕作土のすぐ下層より多量の瓦類が出土したため、関連施設等の存在の有無を確認するため、同時に調査地東側に、西側と同様、南北約28.0m×東西約4.0mのトレンチ（第2トレンチ）を

第1トレンチ



1. Hue2. 5Y6/2 灰黄色砂質土・マンガン混り
2. Hue10YR5/3 におい黄褐色砂質土
3. Hue2. 5Y6/6 明黄褐色シルト
4. Hue10YR4/6 褐色砂礫層
5. Hue10YR5/6 黄褐色砂質土
6. Hue10YR6/6 明黄褐色砂質土・鐵混り
7. Hue10YR4/6 褐色砂質土
8. Hue10YR5/8 黄褐色砂質土 (包含層)
9. Hue10YR5/6 黄褐色砂質土
10. Hue2. 5Y5/6 黄褐色シルト
11. Hue7. 5YR5/6 明褐色シルト
12. Hue7. 5YR5/4 におい褐色砂質土・灰色混り
13. Hue7. 5YR2/4 暗褐色礫層
14. Hue10YR4/4 褐色礫層

第2トレンチ



1. Hue10YR4/4 褐色砂質土・鐵混り
2. Hue10YR4/6 褐色砂質土
3. Hue10YR5/8 黄褐色シルト・小礫混り
4. Hue10YR5/6 明黄褐色砂質土・鐵混り (包含層)
5. Hue10YR7/8 黄褐色砂質土
6. Hue7. 5YR5/6 明褐色シルト
7. Hue10YR4/4 暗褐色礫層
8. Hue7. 5YR4/6 褐色砂礫層
9. Hue7. 5YR5/6 明褐色砂質土・小礫混り (包含層)
10. Hue10YR5/6 明黄褐色礫層

第3図 調査地地層断面図 (1/100・1/50)



1. Hue10YR5/8 黄褐色砂質土・マンガン混り
2. Hue7. 5YR5/6 明褐色砂質土・小礫混り (包含層)
3. Hue10YR6/6 明黄褐色礫層
4. Hue10YR6/8 明黄褐色粘砂土・鐵混り
5. Hue2. 5Y4/4 オリ・ブ褐色粘砂土・小礫混り
6. Hue10YR5/6 黄褐色粘砂土
7. Hue10YR4/6 黄褐色粘砂土
8. Hue10YR5/8 黄褐色粘砂土
9. Hue10YR4/6 褐色小礫混り
10. Hue2. 5Y6/8 明黄褐色粘砂土・小礫混り
11. Hue2. 5Y4/6 オリ・ブ褐色粘砂土・小礫混り



1. Hue10YR4/4 褐色砂質土
2. Hue10YR4/6 褐色砂質土
3. Hue10YR5/6 明黄褐色砂質土

設定し掘削を始めた。結果、第2トレンチからも耕作土よりすぐの下層で、人頭大の石溜り群が検出され、同時に建物の礎石を支える根石群を数カ所で検出するに至った。

これらの検出状況と遺構の重要性とを考え併せ、地権者に了承を得て、調査区を一部拡張し、遺構の確認を行うこととした。

なお、北端は調査期間に限られるため、層位の確認のみとなった。

2) 基本層位

現状地表面から-0.35cmは現耕作土と旧耕作土で、その下層には灰黄色の薄いマンガン層(1)が薄く広がる。マンガン層の下には、明褐色砂質土層(2)(9)と明黄褐色礫層(3)(10)があり、これらの層から第1トレンチでは大量の瓦類が出土し、第2トレンチでは石敷き群や建物跡を検出している。これらの層が、水無瀬藩宮造営と同時期である中世層(鎌倉時代)と考えられる。これらの下層は、試掘の結果より、自然流路堆積と考えられる。

I. 第1トレンチ

【溝SD01~20】

第1遺構面で、南北方向に走る溝(SD01~04)と東西方向に走る溝(SD05~20)を検出した。これらは、近世の耕作時の鋤溝と思われる。

【柱穴群】

トレンチの北側で多くの柱穴を検出した。しかし、明確に建物跡といえるものがなく、柵列や塀の可能性も考えられる。P15、P16、P17については、柱間が約1.8mあり、唯一建物の可能性が考えられる。これらについては今後検討を重ねたい。

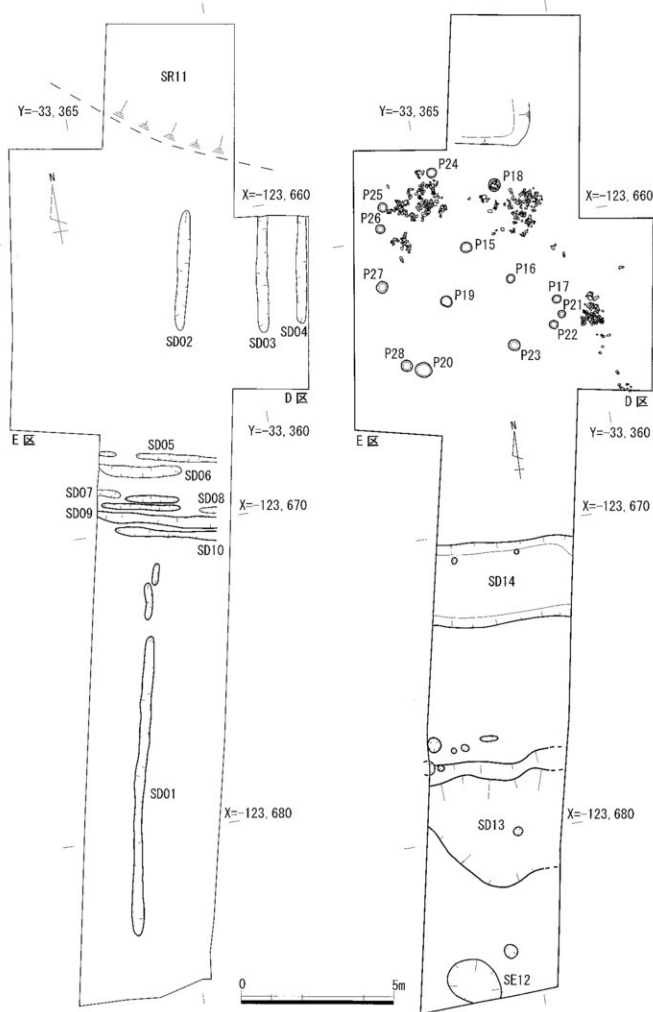
【井戸SE12】

第2遺構面のトレンチ南側で素掘りの井戸を検出した。出土遺物は非常に少ないが、鎌倉時代以降に作られたと考えられる。

【瓦溜り】

トレンチ北側で瓦などが浅い溝に投棄されたような状態で、大量に出土した。

瓦の文様や製作方法より、鎌倉時代初頭(12世紀末~13世紀初頃)のものと考えられ、軒丸瓦では、外区に珠文帯を有する三ツ巴文のものが大半を占め、軒平瓦では、剣頭文のものが大半を占めている。丸・平瓦も出土しているが、いずれも小振りである。この瓦溜りの周辺からは柱穴が多数見つかっているが、建物跡と明確に判断できる材料が乏しく、関連性は不明である。いずれにしても、付近に瓦を使用した建造物があったことが想像される。



第4図 第1トレンチ平面図 (1/125)

【SD13】

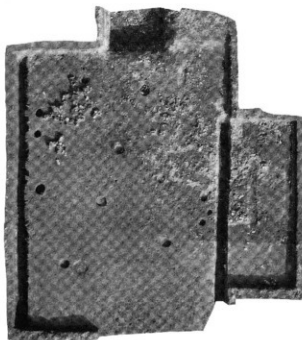
井戸SE12の北側で検出した。非常に深い落ち込みであるが、その性格はよく分からなかった。この溝と東側の第2トレンチが離れているため、第2トレンチとの関連性は不明であるが、東西方向に走る溝の可能性がある。

【SD14】

東西方向の浅い溝である。第2トレンチと繋がる可能性も考えられるが遺物がほとんど出土せず時代の決定はできなかった。

【自然流路SR11】

トレンチの北端で検出した。耕作土のすぐ下層より礫層が走り、遺物などは出土しなかった。試掘の結果などから考えると、東西方向に続く広い範囲で自然流路が広がっていると考えられる。これらは、水無瀬川の氾濫が繰り返された結果出来たものと考えられ、広瀬地域全般に広がっている。



第5図 第1トレンチ 瓦群と柱跡検出状況

【拡張区D・E】

トレンチ内で大量の瓦が出土したため、その出土状況を確認するため東西方向にトレンチを拡張した。

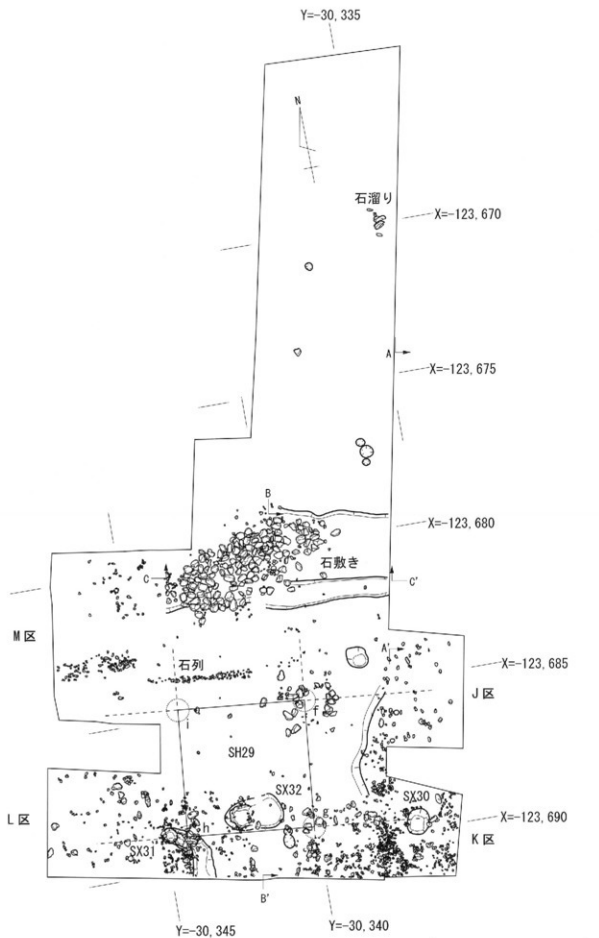
D区では上面で鋤溝を検出し、その下層ではやはり瓦が出土した。

E区も同様の状況で瓦が出土し、下層ではいくつかの柱穴を検出した。

II. 第2トレンチ

【建物跡SH29】

トレンチ南側で、根石で固められた柱跡群を検出した。柱間が約4.2mもある大きな建物と考えられ、北側に石敷き群が検出されており、東西方向に続くと考えられる。どれぐらいの規模の建物であったかは、調査範囲が狭いため不明である。柱を支える礎石が抜かれた状態で建物の根石の部分だけが残っていることや、遺構の検出面が非常に浅いことなどから考えると、後年の土地利用の中で、建物基礎の上部は取り除かれてしまった可能性が高い。



第6図 第2トレンチ 平面図 (1/125)

【石敷き群】

建物跡S H29の北側で検出した。人頭大の平石（約15～25cm）を敷き並べて造られた東西に約8.0m、南北に約3.0mの溝跡を検出した。石敷きの中には瓦が混じり、瓦の文様などから第1トレンチと同様、鎌倉時代初頭（12世紀末～13世紀初め頃）のものと考えられる。建物の北側にあり、雨落ち溝や、あるいは庭園の澗水である可能性が考えられる。また、建物の根石部分だけが残っていることから、建物の基礎である地業の一部とも考えられる。

【石列】

石敷き群の南側で検出した。握り拳大の大きさの石が東西方向に約4.0m並んだ状態で検出した。建物地業の単位とも考えられる。

【土抗S X31】

建物跡S H29の南側の根石（h）のすぐ西側で検出した。ここでは、2点の金属板（飾り金具）が上下に並んだ状態で出土しており、また金属板が出土した北側では、棒状の鉄の塊（金植あるいは楔・鑿など）が出土しており、建物の造営に関わる道具類ではないかと考えられる。そのほかにも周辺では、小片の金属片や白磁碗・皿の破片や瓦類も多数出土しており、この建物が石敷きの溝を有する華麗で大規模な建築物であったことを想像させる。

【土抗S X32】

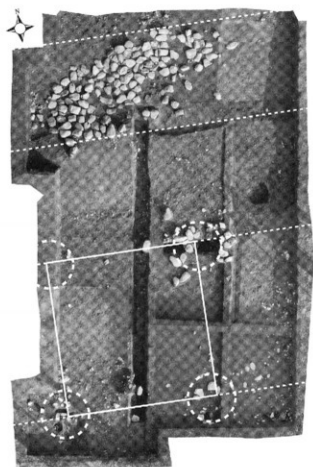
建物跡S H29の南側で検出した。大量の細かい土師器片が投棄された状態で出土した。非常に細かいため、形状を判断できるものはほとんどなかった。

【土抗S X30】

拡張区K区から検出され、規模は直径約1.0mの円形で、土器類はほとんど出土しなかった。

【石溜り】

トレンチ北側で検出した。



第7図 第2トレンチ 石敷きと建物跡検出状況

約40cmの石数個が整地層の中に埋め込まれた状態で検出された。後の立会調査で、周辺から多量の瓦が投棄された土坑を検出したため、何らかの建物に関係すると考えられる。

【拡張区 J・K・L・M】

建物跡が東西方向に伸びていると考えられたため、トレンチを東西方向に拡張した。

J区ではfの東4.2mの位置に、根石等は残念ながら検出できなかった。

K区では南端に根石らしき石群を検出したが、建物跡SH29との関連は分からなかった。

L区では金属の塊や、白磁片の出土が他の地区に比べて多かった。飾り金具の出土もこの周辺である。

M区では石敷き溝の延長部にあたり、掘削の結果西方向にさらに約1.0m伸びており、石敷きはそこで途切れていることが分かった。途切れているのか、石が取り除かれた結果かどうかは不明である。周辺では軒丸瓦が出土している。

3) 出土遺物

今回の調査において最も多く出土した遺物が瓦であり、軒丸瓦30点、軒平瓦36点、丸瓦151点、平瓦604点の計819点出土している。瓦のほかには、土師器片が多く出土しているが、破片が多く、図化できるものは少なかった。瓦器類も若干含まれるが少ない。

中でも特筆すべき特徴として挙げられるのは、多くの輸入陶磁器類の破片や飾り金具と見られる金属器片なども建物跡（SH29）付近から出土していることである。

軒丸瓦（第8・9図・図版三・四）

軒丸瓦は、巴文を第1型式、宝相華文を第2型式と2型式に分類した。

第1型式は11種20点出土しており、第1種（6）が1点、第2種（1・5）が2点、第3種（2・3）が2点、第4種（7）が1点、第5種（8）が1点、第6種（13・16）が2点、第7種（4）が1点、第8種（9・10）が2点、第9種（11）が4点、第10種（15）が1点、第11種（12）が1点出土している。

第1～7種は珠文帯を有する右巻三ツ巴文、第8・9種は珠文帯をもたない右巻三ツ巴文、第10種は珠文帯を有する左巻三ツ巴文、第11種は珠文帯と圏線を有する右巻二ツ巴文である。

第1種は大きな珠文を密に、第2・3・5・7・10・11種は大きな珠文を疎に、第4・6種は小さな珠文を疎に配する。

第2・3・8・11種の巴頭は尖るが、第6・7・9種の巴頭は尖らずに丸まる。また、第9種のみ巴頭と巴胴の間にくびれをもつ。第8種と第9種は文様が酷似しているが、第8種は巴頭が尖り、巴頭と巴胴の間にくびれをもたないのに対して、第9種は巴頭が丸まり、巴頭と巴胴との間にくびれをもつという差異が見られる。

第2型式は1種2点出土している。第1種(17・18)は退化した宝相華文であり、蓮弁の周囲には小さな珠文を密に配する。

(14)は珠文帯の内側に欠損しているが、高く平板な珠文をもち、その特徴から他型式のものとは異范であることがわかる。内側の文様は巴文である可能性が高いと思われるが、今回の報告では、あえて型式をつけることはせず、全体像が明らかになるときまで保留としておきたい。

平成22年度の広瀬遺跡(国木原)の調査においても、第1型式第5種と第2型式第1種の同范品が出土している。また、平成22年度の調査では、軒平瓦のように平瓦部凹面や丸瓦の凸面にヘラ書きが記されたものが出土したが、本調査では(4)の丸瓦部凸面に直線のヘラ書きが残るものが出土しており、軒丸瓦にもヘラ書きが記されるものがあることが確認できた。

軒丸瓦の出土点数の割には2型式12種と使用されている范の数は多いが、法量は全てほぼ等しく、瓦当直径は11.0cm前後、瓦当部の厚さは2.0cm前後を測る。瓦当裏面は指オサエを行なっているのみで、平滑に仕上げられてはいない。丸瓦部は、後述する丸瓦と同様に、凸面に縄タキ痕を顕著に残し、凹面に細微な布目痕を残すが、(4)のように凹面に布目痕を残さず、糸きり痕が明瞭に見えるものも存在する。

軒平瓦(第10・11図・図版四・五・六)

軒平瓦は、剣頭文を第1型式、剣巴文を第2型式、連珠文を第3型式、均整唐草文を第4型式と4型式に分類した。

第1型式は13種27点出土しており、第1型式第1種(19・22)が3点、第2種(23)が2点、第3種(20)が2点、第4種(25)が1点、第5種(21)が1点、第6種(24)が1点、第7種(26)が1点、第8種(27)が2点、第9種(28)が1点、第10種(32)が1点、第11種(33)が3点、第12種(34)が1点、第13種(35)が2点出土している。(30・36)の他に第1型式のものが数点あるが、小破片であるため分類することはできなかった。(30・36)のみ図化しておく。

第1型式は全て陰刻の剣頭文であるが、剣頭文の子葉が放射線状に並ぶものと平行に並ぶものの2種類が存在する。第1～5種は放射線状に子葉が並ぶものであり、第6～13種は平行に子葉が並ぶものである。第1～9種が弁の縦横の長さがほぼ等しいのに対して、第10～13種は弁が縦長である。特に第12・13種は弁の先端が瓦当部を突き出るほど縦に長く、范も深く、全体的にシャープな印象を受ける。

第2・5・8・9種は6弁の剣頭文であり、第1・3種は7弁の剣頭文である。ただし、第3種は向かって左端の弁の半分の位置で范が切り縮められており、6弁半の剣頭文となっている。

第3・12・13種の瓦当裏面と平瓦の接合部には、凹面側の調整の際に乗せた凹型の台の痕跡が残る。また、第3種には平瓦部凸面、第13種には瓦当裏面にまで布目痕が残り、京都系の瓦の作り方の特徴である折り曲げ技法によって製作されていることがわかる。

第2型式は1種1点出土している。第2型式第1種(29)は中央に凹を置き、左右に4弁ずつ剣頭文を配した剣凹文である。凹面から瓦当面・瓦当裏面にかけて連続した布目痕が残り、折り曲げ技法によって製作されていることがわかる。

第3型式は1種2点出土している。第3型式第1種(31)は半球状の珠文を横に並べるものである。第3型式のものは全て瓦当面の下半分で剝離しており、平瓦凸面に顎となる粘土を貼り付けて瓦当部を成形する顎貼り付け技法によって製作されていることがわかる。

第4型式は2種2点出土しており、第4型式第1種(37)・第2種(38)はそれぞれ1点ずつ出土している。第1種は欠損が著しいが、唐草の文様構成から平成22年度の調査時に出土した中央に「w」字状の唐草を配する均整唐草文の類であることがわかる。第2種は第1種の文様が退化したものであり、第2種と酷似するものも平成22年度の調査時に出土している。同一箇所が残存していないため、比較することはできないが、同范の可能性が高い。

4型式17種と范の数は多いが、軒丸瓦と同様に法量はほぼ等しく、瓦当幅は16.0cm前後、瓦当部の高さは3.0cm前後を測る。平瓦部凹面には細緻な布目痕を残す。平瓦部凸面はタテナデによって縄タタキの痕跡を消すものが多いが、第1型式第1・2・8は縄タタキの痕跡を顕著に残す。第1・2・4型式のものは、その法量、縦方向に平行する縄タタキ痕、瓦当部の折り曲げ技法による製作から京都系の瓦であると考えられるが、第3型式の瓦に見られる顎貼り付け技法は大和・和泉地域などに見られる技法である。

丸瓦(第12・13図・図版六)

丸瓦は、小型品を第1型式、大型品を第2型式と2型式に分類した。

出土した丸瓦のほとんどが第1型式のものであり、今回の調査では第2型式のものは1点のみしか出土していない。

第1型式(39~41・43~45)は広端幅11.0cm前後、狭端幅10.0cm前後、厚さ1.5cm前後、弧深3.5cm前後であり、凸面には縄タタキの痕跡を明瞭に残す。凹面には細緻な布目痕を残すが、(39)はやや粗い布目痕を残し、糸切り痕も見える。平成22年度の調査時の出土品と同様に、(39)は胴部狭端側に、(41)は玉縁部にヘラ書きが行なわれているものが確認できた。

第2型式(42)は玉縁部付近のみしか残存していないが、厚さ1.65cm、弧深5.55cmと第1型式に比べ大型であることがわかる。凸面のタタキの痕跡はナデ消されており、凹面の布目痕も粗い。第1型式が胴部凹面側端縁の面取りは行なっているが、凸面側端縁の面取りを行っていないのに対して、第2型式は凹・凸面両側の面取りを行なっている。また、第2型式は

第1型式の丸瓦には見られなかった釘穴が玉縁部中央に空けられている。

平瓦（第14・15図・図版六）

平瓦も、小型品を第1型式、大型品を第2型式と2型式に分類した。

丸瓦と同じく、出土した平瓦のほとんどが第1型式のものであるが、第2型式のものも少なからず出土している。

第1型式（47・49）は全長22.5cm前後、広端幅15.0cm前後、狭端幅13.0cm前後、厚さ1.2cm前後を測る。凸面には縄タタキの痕跡が残り、凹面には布目痕の痕跡が残らないものが多いが、凸面に縄タタキの痕跡が残らず、粗雑な指オサエしか行っていないものや、凹面に細微な布目痕が残るものも存在する。

第2型式（46・48）は全長30.0cm前後、広端幅20.5cm前後、厚さ1.6cm前後であり、凸面には縄タタキの痕跡が残り、凹面には粗い布目痕が残る。凸面の縄タタキに使用された縄は第1型式のものに比べて太く、その痕跡も深く残る。また、凹面側狭端縁は面取りを行なう。

本調査で出土した瓦は全体的に軟質であるが、色調は白色から黒色まで様々である。同範のものは同様の色調を呈する傾向があるが、中には同範のものでも色調が全く異なるものも存在する。

軒丸瓦第1・2型式と軒平瓦第1・2・4型式、丸瓦第1型式、平瓦第1型式は量量・焼成・胎土・調整技法の類似性からそのいずれかが組み合わせる可能性が高い。丸瓦第2型式と平瓦第2型式は出土点数が少なく、残存状況も良くないため組み合わせるかどうかは不明である。

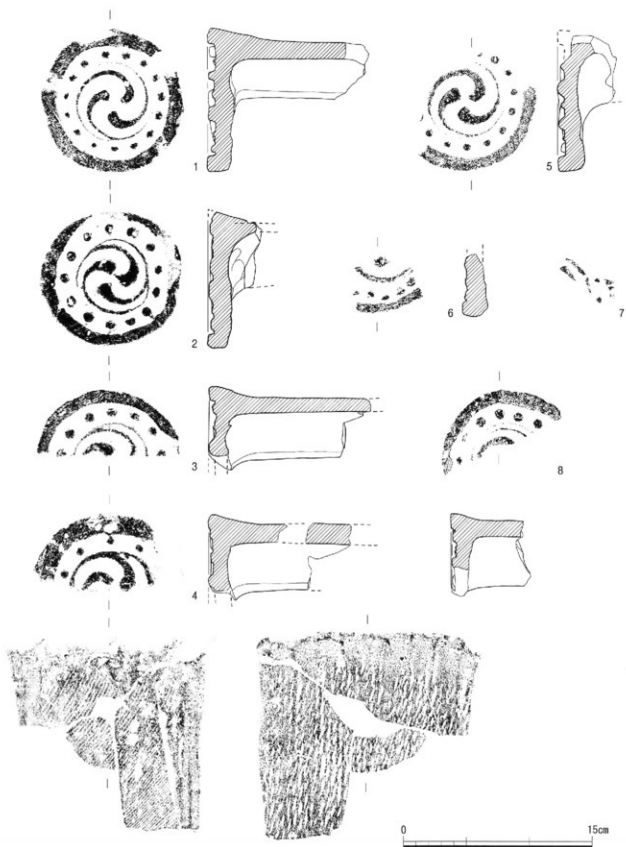
その他の土器（第16図・図版七）

瓦以外で出土した土器について、記述する。

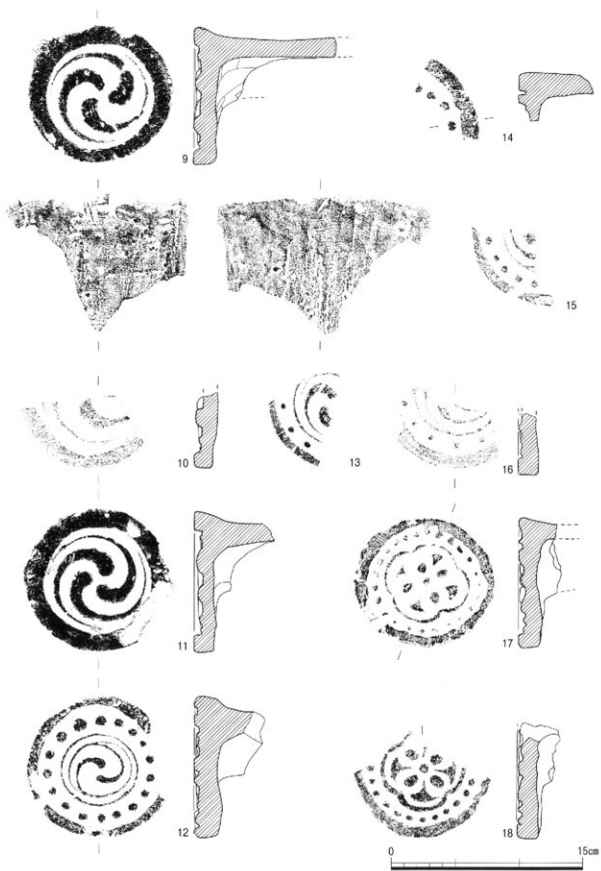
土師器皿が大半を占め、地色色を持った樟葉産のものが多い。他には須恵器、瓦器、羽釜、輸入陶磁器類などで、第2トレンチで多く出土している。13世紀中頃～後半のものが中心である。

土師器皿（50～59）はいずれも、第2トレンチより出土したもので、口縁部はヨコナデ、体部はユビオサエを施している。（50）はコースタ型の皿で、口径は8.0cmで他にも数点出土しており、口径もほぼ同じくらいである。（51・53・54・57）は口縁端部に面を持ち内湾する。口径は約8.0cmのものと約13.0cmのものがある。中でも（51）は体部と口縁に明確な稜を持つ。（52・59）は口縁の立ち上がりが他に比べてやや浅いのが特徴である。

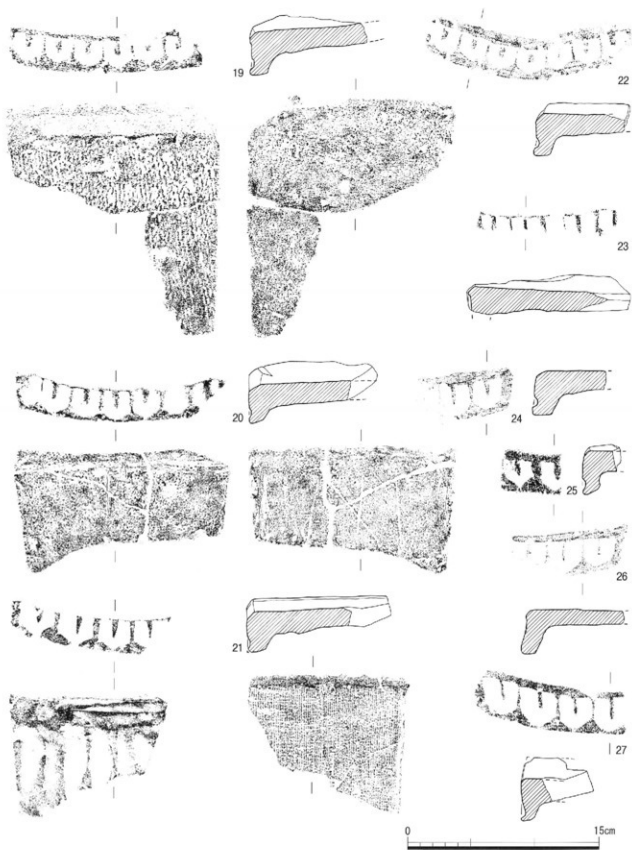
（60・61）は瓦器埴である。（60）は見込みの部分に暗文を施している。磨滅がひどく、内外面体部の暗文の有無は分からない。第1トレンチより出土している。（61）は内面体部に暗文を施しており、磨滅が激しいが、外面口縁部にも若干暗文が見える。前述の土師器の時期よりは新しいと思われる。（62）は平安時代の須恵器の平底の甕で外面にタタキを施す。東海系



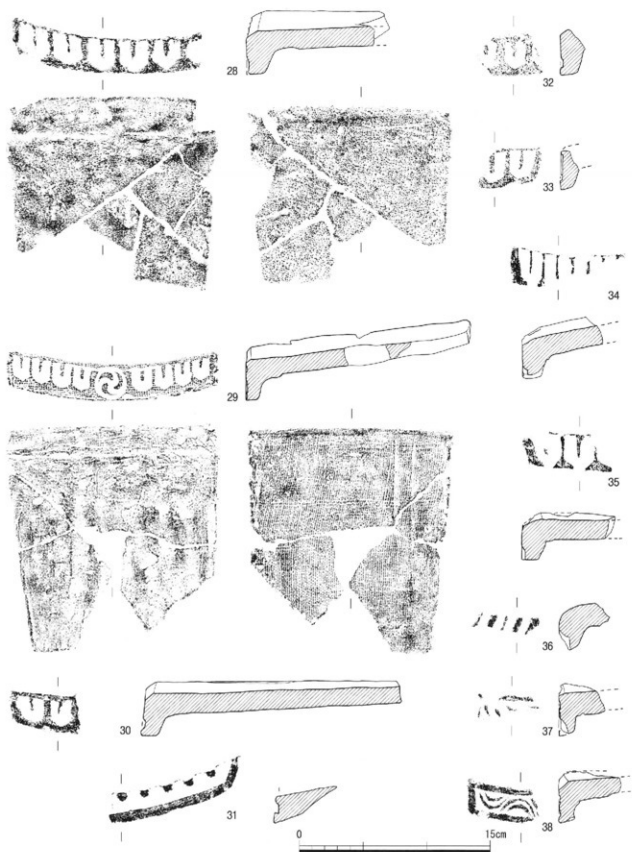
第8图 出土遗物实测图(1/3)



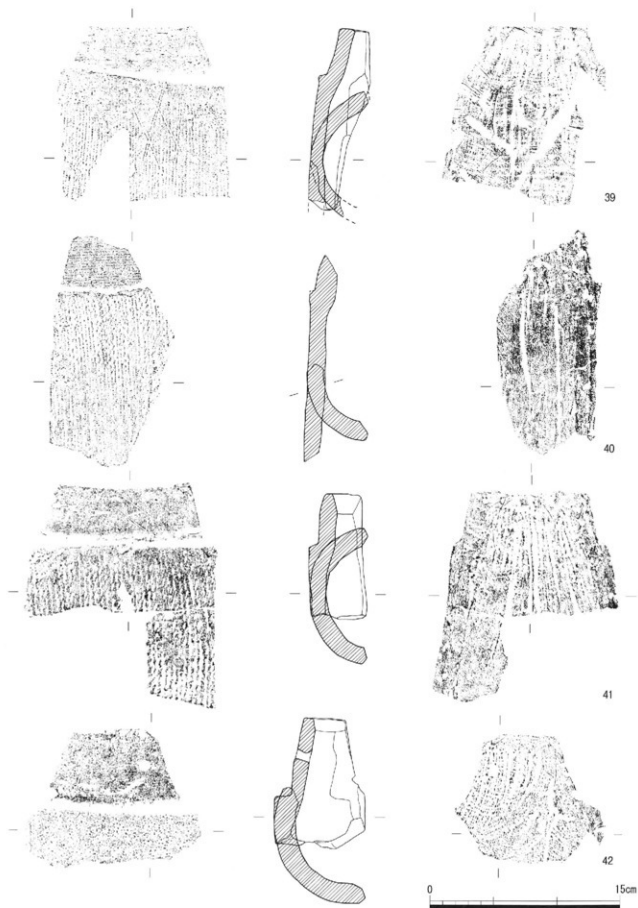
第9図 出土遺物実測図(1/3)



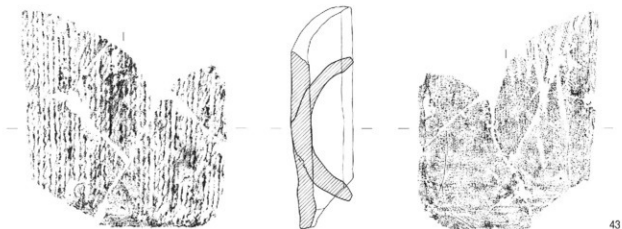
第10图 出土遗物实测图(1/3)



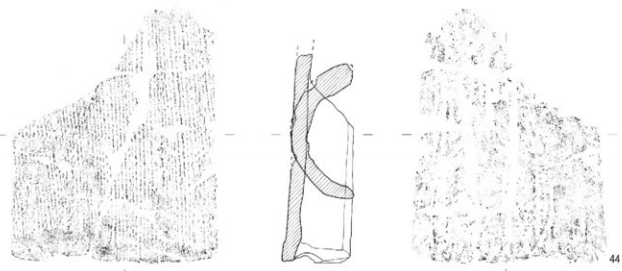
第11図 出土遺物実測図 (1/3)



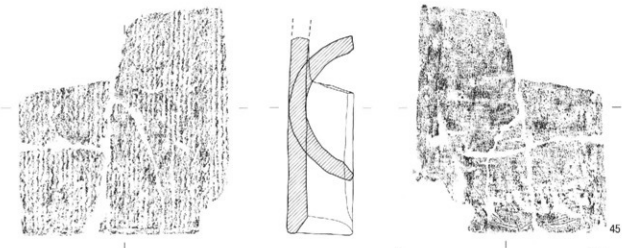
第12図 出土遺物実測図 (1/3)



43



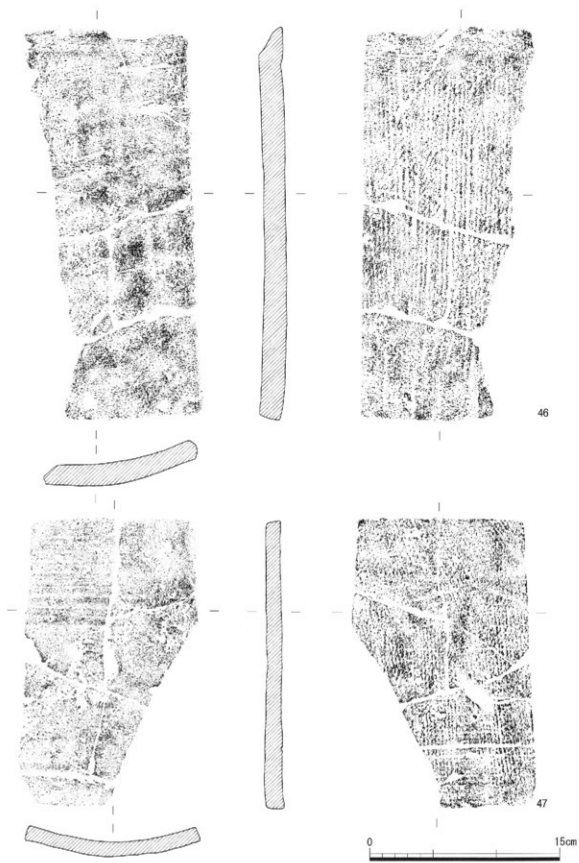
44



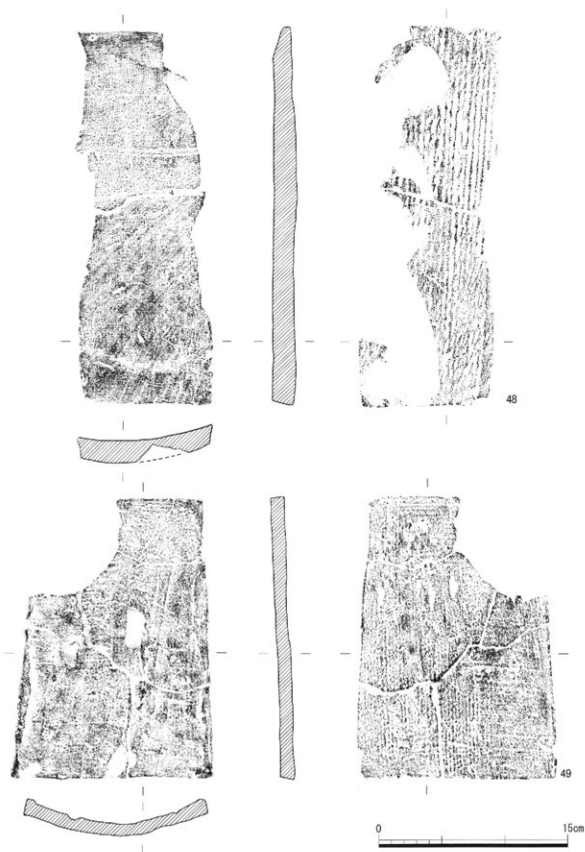
45

0 15cm

第13図 出土遺物実測図 (1/3)



第14図 出土遺物実測図 (1/3)



第15図 出土遺物実測図 (1 / 3)

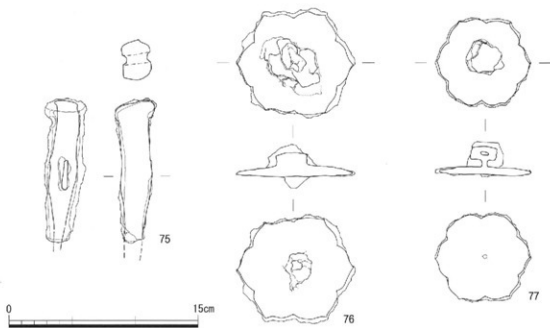
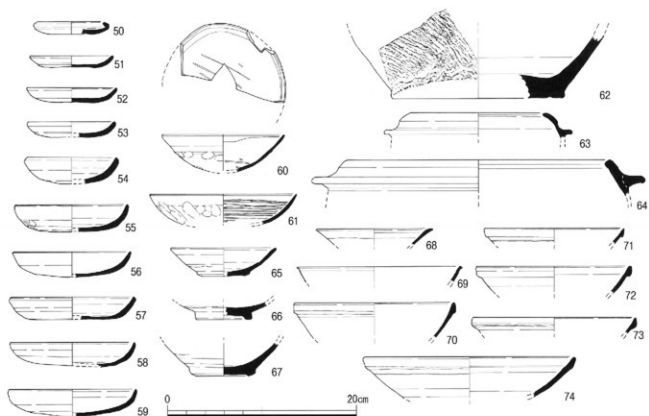
表1 軒丸互観察表

No.	型式番号	瓦当部										丸瓦部										へう 書き	備考			
		文様	縁丈 数	屋根 幅	直径	瓦当厚	外気			縁付	全長	厚さ	取深	取端幅	凸凹 調整	凸凹 調整	凸凹 調整	凸凹 調整	縁付	片組						
							幅	高	調整																	
1	1型式2種	右巻三ツ巴文	15	×	11.30	1.90	1.10	0.85	×	○	(12.90)	1.45	2.20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	丸瓦部の凸凹調整が少ないため	
2	1型式4種	右巻三ツ巴文	13	×	11.20	1.90	0.90	0.40	ナテ	○	(4.20)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縁付時の傾斜調整に注意が必要	
3	1型式5種	右巻三ツ巴文	(7)	×	11.00	1.90	0.90	0.45	×	○	(12.90)	1.00	2.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	丸瓦部調整にも凸凹調整が異なる 調整及び凸凹調整に注意	
4	1型式7種	右巻三ツ巴文	(4)	×	11.70	1.70	1.85	0.30	ナテ	○	(16.40)	1.40	4.15	—	×	×	○	調	×	—	—	—	—	—	丸瓦部調整にも凸凹調整が異なる 調整及び凸凹調整に注意	
5	1型式2種	右巻三ツ巴文	(10)	×	11.80	2.20	0.80	0.50	×	○	(19.20)	1.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
6	1型式1種	右巻三ツ巴文	(5)	×	(5.00)	2.00	0.75	0.30	ナテ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦当調整	
7	1型式4種	右巻三ツ巴文	(2)	×	(2.65)	1.70	0.90	0.30	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
8	1型式6種	右巻三ツ巴文	(6)	×	(6.50)	1.50	1.10	0.40	×	○	(6.40)	1.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9	1型式8種	右巻三ツ巴文	0	×	10.70	1.80	0.95	0.50	×	○	(11.15)	1.40	3.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	1型式8種	右巻三ツ巴文	0	×	(5.80)	1.40	0.90	0.50	ナテ	×	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	1型式8種	右巻三ツ巴文	0	×	11.20	1.90	1.40	0.60	ナテ	○	(12.20)	1.40	3.90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦当部・丸瓦部凸凹調整が異なる 調整に注意
12	1型式11種	右巻三ツ巴文	17	○	11.20	2.20	0.65	0.30	ナテ	○	(5.50)	1.70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦当調整に調整が異なる
13	1型式6種	右巻三ツ巴文	(3)	—	(6.20)	1.80	0.80	0.40	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凸凹調整の異なる調整に注意
14	—	—	(4)	—	(6.00)	1.80	1.40	0.60	×	×	(5.80)	1.55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	平面的な調整
15	1型式10種	左巻三ツ巴文	(3)	×	(5.30)	1.80	0.80	0.85	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	1型式6種	右巻三ツ巴文	(5)	—	(4.70)	1.60	0.95	0.35	×	○	(2.60)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	凸凹調整の異なる調整に注意
17	2型式1種	宝相華文	24	×	10.10	1.80	1.00	0.40	×	○	(3.30)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	2型式1種	宝相華文	(12)	×	(9.20)	1.70	0.90	0.35	ナテ	○	(3.30)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	瓦当調整に注意

表2 軒平互観察表(1)

No.	型式番号	瓦当部										平瓦部										へう 書き	備考				
		文様	縁丈 数・ 取端幅	上取端 幅	平取端 幅	高さ	瓦当厚	取深	取端幅	調整	縁付	全長	厚さ	取端幅	調整	凸凹 調整	凸凹 調整	凸凹 調整	凸凹 調整	縁付	片組						
																								幅	高	調整	
19	1型式1種	刺繍文	(8)	(2.00)	(14.50)	2.00	1.90	1.10	0.90	0.20	×	○	(13.90)	1.85	(2.20)	ナテ	×	×	調	○	—	—	—	—	—	—	調整の一部に凸凹調整が異なる 調整に注意
20	1型式4種	刺繍文	8.5	(5.90)	(12.80)	2.60	1.30	1.60	0.30	0.20	—	—	(19.00)	1.85	—	凸凹 調整	ナテ	×	×	×	○	—	—	—	—	—	調整に注意
21	1型式4種	刺繍文	(4)	(12.90)	(9.30)	2.60	2.00	1.00	0.40	0.25	×	×	(11.20)	1.95	—	凸凹 調整	ナテ	×	×	×	×	—	—	—	—	—	凸凹調整に注意
22	1型式4種	刺繍文	7	16.10	(14.70)	2.60	1.80	1.70	0.40	0.20	×	○	(6.10)	1.75	—	凸凹 調整	×	×	調	○	×	—	—	—	—	—	調整に注意
23	1型式2種	刺繍文	(5)	(11.80)	—	(1.40)	—	1.25	—	—	—	—	(13.00)	1.85	—	凸凹 調整	×	×	調	○	—	—	—	—	—	調整に注意	
24	1型式4種	刺繍文	(2)	(4.90)	(4.00)	2.65	2.05	—	0.45	0.30	×	○	(6.10)	1.80	—	凸凹 調整	—	—	—	○	×	—	—	—	—	—	調整に注意
25	1型式4種	刺繍文	(2)	(4.40)	(4.40)	3.05	1.50	—	0.40	0.15	×	○	(1.30)	1.80	—	凸凹 調整	—	—	—	—	—	—	—	—	—	調整に注意	
26	1型式3種	刺繍文	(2)	(6.70)	(4.05)	3.00	1.60	—	0.40	0.40	×	×	(6.20)	1.20	—	凸凹 調整	ナテ	○	×	×	×	×	—	—	—	調整に注意	
27	1型式4種	刺繍文	(4)	(9.80)	(10.35)	3.20	1.50	1.30	0.20	0.20	×	○	(5.90)	1.70	—	凸凹 調整	×	×	調	×	—	—	—	—	—	—	調整に注意
28	1型式4種	刺繍文	(6)	(12.40)	(14.40)	2.85	2.20	1.70	0.20	0.20	×	○	14.60	1.90	—	凸凹 調整	ナテ	×	×	×	×	×	—	—	—	調整に注意	
29	2型式1種	刺繍文	1+8	16.40	(6.40)	2.90	1.45	1.30	0.10	0.10	×	×	(12.70)	1.40	(3.20)	凸凹 調整	ナテ	×	×	×	○	—	—	—	—	調整に注意	
30	1型式1種	刺繍文	(2)	(4.70)	(4.20)	2.80	1.80	—	0.40	0.35	×	×	20.90	1.40	(4.30)	—	×	○	×	○	×	×	—	—	—	調整に注意	

付表1・2 出土互観察表



第16図 出土遺物実測図 (1/4・1/3)

のものか。(63)は赤色を呈しているが、炭素が飛んだ状態の瓦質の羽釜の可能性はある。(64)は第1トレンチの井戸SE12から出土しており、樟葉産の土師器の羽釜である。

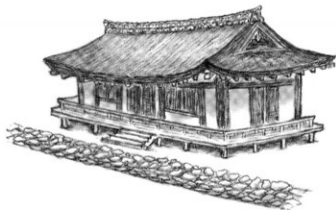
(65~74)は白磁碗・皿である。(65)は口縁がやや外反し、体部の中央付近で屈曲し、内面には明確な稜線を持つ皿である。(66)は外面下方に一条の沈線が巡る。(67)は高台部に糸きりの痕跡をわずかに残す。高台内側のケズリは非常に浅い。(68・69)の口縁端部は短く外反している。(70~74)はいずれも口縁部が玉縁状を呈する。これらの白磁は他の出土した土器類よりも古く、11世紀後半~12世紀頃のものと考えられる。

(75・76・77)は金属製品である。(75)は長さ約12.0cm、幅約2.0cmである。本来はもう少し長いと考えられる。本体のほぼ中央に長方形の孔をもち、頭初は金種の頭と考えていたが、孔の形などから楔や鏝、あるいは釘状の何かとも考えられ、ここでは使用用途の断定は避けておく。(76・77)は六葉形の金具で、釘隠しや紐金具の可能性が考えられる。中心から孔の部分が突出しているところから考えると、後者の可能性が高い。

第4章 まとめ

今回の主な調査成果は、鎌倉時代初頭と推定される時期に造られた礎石建物跡や、石敷き溝を検出したことである。また、それに伴って多くの瓦が出土したことも大きな成果であるといえる。後鳥羽上皇が水無瀬離宮を造営したとされるこの地で、このような遺構が発見されたということは、同時に、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮に関係する建物施設であるか、あるいは、水無瀬離宮が営まれたのと同時代の建物跡であった可能性が高いと考えられる。

今回の遺構は調査地が狭いため建物の規模や構造はあくまでも想像になるが、北側に雨落ち溝(石敷き)を持つ、柱の間隔が4.2メートルもある非常に大きな東西方向の建物があったと仮定することが出来る。もちろん、雨落ち溝と考えた石敷きの溝については、遺構の検出状況や周辺の様子から、庭園の鑑水の一部分や、あるいは、建物建設の基礎である地業の一部であるなどの可能性も大いに考えられるところではあるが、いずれにしても、今回出土した瓦の大半が小振りであったことや、想像される建物の規模からすると、比較的瓦の出土数が少なかったことなどから、瓦は屋根の檼部分にだけ使用された、桧皮葺の建物と考えられ、建物の外周には「縁」(いわゆる縁側)が取り付けられる非常に立



第17図 検出建物想像図

派な建物と想像される。

この付近でこのような巨大建物や、水無瀬離宮が造営されたのと同時代の施設と思われる遺構が発見されたのは初めてのことである。もちろんこの建物が水無瀬離宮に直接関係する施設かどうかは現在検討中であるが、JR東海道本線に沿う今回の調査地は、水無瀬離宮の上御所と推定されている場所（島本町百山付近）の南東約0.2kmにあたり、現在の水無瀬神宮（下御所）との中間に位置している。また、字名を調べてみると調査地は「国木原」にあたり、周辺には、「金井戸」「角馬場」「御堂端」「下ノ森」などがあり、この付近に離宮に関係する施設があったことが想像される。

出土した遺物からみると、今回の発掘調査で、最も出土量の多い瓦のほとんどは京都産の瓦であり、特に栗栖野瓦窯産のものであると考えられる。この栗栖野瓦窯は京都の宮跡や寺院跡に瓦を供給した官営の瓦窯である。この時期に官営の瓦窯から瓦が供給されるような建物は、島本町内では水無瀬離宮しか文献には残っていない。その他の土器を見ても、地域色を示すものが大半を占めているが、京域の様相を呈する土器類も多く含まれている。中でも、水無瀬離宮造営より遡る11世紀代のものと考えられる輸入陶磁器の青磁・白磁片などが多く出土しており、離宮が存在した期間に使用されたと十分考えられるのである。そして、礎石の根石部分の周辺から飾り金具や、金属製品類が出土していることも離宮の存在を物語る資料の一つであるといえる。

今回の調査によって発見された礎石建物の規模や性格について即断はできないが、今まで実態の分からなかった、後鳥羽上皇の院の御所であった水無瀬離宮跡に関連するか、または、同時代に存在した大規模な施設の一部を初めて確認したという可能性はきわめて高いと思われる。考古学上、本誌の掲載資料が水無瀬離宮に関係する資料として注目すべきものとなったが、今回の調査以降、周辺の住宅建設時の基礎掘削時に立会調査を行なった結果、関連すると思われる遺構や瓦などの出土が確認できた場所もある。また、過去に行なった調査についても関連



第18図 現地説明会風景



第19図 調査終了後の宅地風景

の遺構であった可能性も出てきた。既刊の報告書もあるが、これらの資料の再整理を行い、周辺の調査結果を加えて、今後報告を行なっていきたいと思う。

平成20年3月にJR島本駅が開業して以来、本町では宅地開発の波が押し寄せ、埋蔵文化財の届出件数也非常に増えてきている。埋蔵文化財包蔵地内・外での立会調査や遺跡範囲確認調査の実施は、地域の歴史を考える上では非常に重要な役割を果たしていると言える。本町では様々な史料により、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮が存在していたことが分かっている。そんな中での今回の調査成果は、日本の中世を考える上での重要な基礎資料の提示につながったと考えられる。また、政治史上、いわゆる院政期は後白河上皇までを指すが、鎌倉幕府に対して独自の政治的権力を有していたという点で、後鳥羽上皇までを院政期に含めることができる。そのため、今回の調査成果は、院政期の終焉を考える上でも重要な資料となったと考えられる。

これらの調査を計画的に進めていくことは、島本町内の貴重な遺跡を保護していく上でも貴重と考えられ、今後も遺跡の調査を行い、その保護・保全に努めていきたい。

また、こうした調査をはじめとする文化財保護に係る施策は、申請者や町民の方々の理解・協力が成り立つもので、これからのそうした助力を求めながら保護に努めていきたい。

〈参考文献〉

- 京都大学大学院文学研究科 『京都大学所蔵古瓦図録Ⅱ（天沼俊一コレクション 日本篇）』
21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的文学の拠点形成」事業実施委員会
2007年
- 久保智康 『日本の美術 鍔金具』第437号 2002年
- 島本町史編さん委員会編 『島本町史 本文編』 1975年
- 島本町教育委員会 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第1集 1991年
- 島本町教育委員会 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第17集 2011年
- 島本町教育委員会 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第18集 2012年
- 島本町教育委員会 『島本町埋蔵文化財調査報告書』第20集 2012年
- 星野猷二 『塩澤家蔵瓦図録』伏見城研究会 2000年
- 星野猷二・宇佐晋一 『器瓦録想』伏見城研究会 2004年
- 北陸中世考古学研究会 『北陸中世の金属器－生産と流通－』 1998年
- 森蘆 『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所10周年記念学報 1962年
- 鹿苑寺 『特別史跡特別名勝 鹿苑寺（金剛寺）庭園 防災防犯施設工事に伴う発掘調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊 1997年

圖 版



調査地全景（東側から 島本町立第一小学校より）



第1遺構面トレンチ全景（北から）



トレンチ北側完掘状況（北から）



瓦の出土状況



石敷き群 (東から)



地業の一部と石敷き (南から)



溝SD13 (東から)



根石群と地業 (東から)



根石 (東から)



北側の石列 (西から)



飾り金具検出状況 (北から)



土器溜りS X32検出状況 (南から)



1



2



4



8



6



7



14



9



11



12



15



13



17



19



20



21



26



23



27



24



28



25



29



31



37



38



35



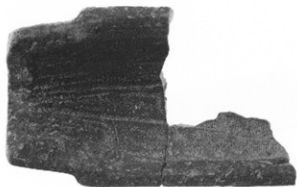
34



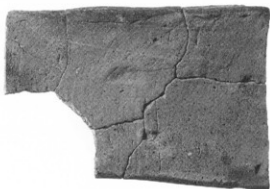
39



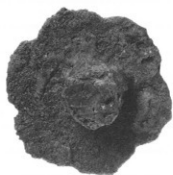
47



41



49



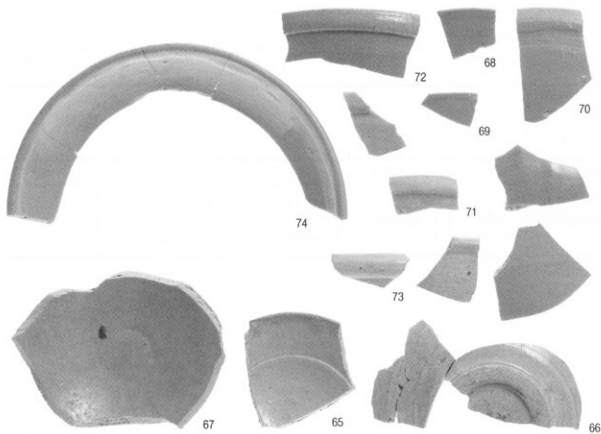
77



76



75



報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしよ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡（国木原）発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	久保直子、坂根 瞬、木村友紀
編集機関	島本町教育委員会事務局 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 Tel.075-961-5151
発行年月日	平成24年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
遺跡範囲								
ひろせいでん 広瀬遺跡	しまもとちょうぶんかざ 島本町広瀬 一丁目地内	27301	14	34° 53′ 5″	135° 40′ 4″	2009.12.10 ～ 2010.1.30	400㎡	宅地開発に 伴う遺跡範囲 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
広瀬遺跡	離宮	鎌倉時代	柱穴・溝・井戸 燵物跡	瓦・土師器・白磁 飾金具・釘	なし

島本町文化財調査報告書 第19集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町板井二丁目1番1号
TEL 075-961-5151

発行日 平成24年3月30日

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中央区新町通竹屋町下4-弁財天町300
TEL 075-256-0961

